

第二〔：内の能取が成立していないこと〕を説明するなら、

或る者〔、独覚と唯心派〕^(訳註29)は、内の〔知るもの・〕能取の心は、**自証知**、**自明知**として本当に成立していると主張します。そのように主張するが、それが成立していないこと理由は三つです――

- 1) 心それは**刹那**として観察することにより成立していないことと、
- 2) 心それは誰も見ることが無いので、本当は成立していないことと、
- 3) **対境**が無いので、心は成立していないことです。

内の能取：内の対象を捉えること。または認識の主観（知るもの）
⇔外の所取（知られるもの）

自証知 self-awareness 自明知 self-illumination：「識が識自体を知る」はたらき

刹那 momentariness：時間の最小単位。極めて短い時間

対境 objects：「対象」に同じ。

訳註 p 345 より：唯識派を言うのであろう

ここでは、「或る者〔、独覚と唯心派〕^(訳註29)は、内の〔知るもの・〕能取の心は、自証知、自明知として本当に成立していると主張します。」という見解について、1) 2) 3) の点で「成立しない」という、**論証する命題**を示している。

※参考文献『入菩薩行論』ポタラカレッジ版 P206～207

唯識派は、「識が識自体を知る」はたらきである自証分を設定することによって、識が自相（本質）によって成立する、実体的なものであることを論証しようとします。（中略）中観帰謬論証派は、「客体と主体は互いに依存して成立する」と相互依存を認めますので、対象を認識する以外に、対象を認識するものをさらに認識すべき、別の正しい認識は必要なく、従って自証分は認めません。つまり中観帰謬論証派は、自相については、ことばとしてすら認めないのです。

まず、**論証する命題**、**唯識派が実在を主張する「自証知や自明知の心」が成立していないことについて**、第一〔：心それは刹那として観察することにより成立しないこと〕という**論理による論証**に、入っていきます。

そのうち、第一〔：心それは刹那として観察することにより成立しないこと〕は、あなたが主張する**自証知**、**自明晰**の心それは、1) 刹那として有るのか、2) 多として有るのか。

〔第一：〕刹那として有るというなら、1) それには**三世**の分が有るのか、2) それには三世の分がないのか。第一のようなら、刹那は成立していない、すなわち多であるはずです。

自証知 self-awareness、**自明晰 self-illumination** の心：「識が識自体を知る」はたらきの心

三世 the three times：①前世、現世、来世／過去・現在・未来 のこと

beginning, middle, end

②たえまなく、ひきつづき、の意

(試訳)

(唯識派が主張する) 自証知の心(識が識自体を知るはたらきの心)は、刹那(one moment)または多(many moments)のどちらのなかに見いだせたのだろうか？もし、(唯識派が主張する) 自証知の心が、刹那のなかに見いだせるなら、刹那に「三世の分(時間的な前の部分や、後の部分など)」があるということである。三世の分があるなら刹那は成立せず、したがって多であるはずだ。

そのようにまた『宝鬘(ほうまん？ほうばん？)』^(訳註 30)に、「刹那〔に〕は最後が有るように、同じく最初・中間を観察することが必要です。そのように刹那の三つを観察するなら、世間〔に〕は刹那は住しない。」と説かれています。

そのうち、三世の分が無いなら、刹那それは非事物のほうです。よって、刹那は〔事物として〕成立していないので、心もまた〔事物として〕成立していないのです。

第一〔：心それは刹那として観察することにより成立しないこと〕についての、**経典による論証**をしています。

『宝鬘』でも、刹那は(事物として) 成立していないので、(唯識派が主張する) 自証知や自明知の心は、成立しないと述べている。

〔第二：〕多として有るというなら、刹那が成立しているなら、刹那が集積した多が成立すべきなのに、刹那が成立していないので、それが集積した多もまた成立していないのです。多が成立していないので、心もまた成立していないのです。

刹那が成立していないので、それが集積した多もまた成立していない。よって、（唯識派が主張する）自証知や自明知の心は、成立しない。

以上、論証する命題、唯識派が実在を主張する「自証知や自明知の心」について、1) 刹那として観察することにより成立していない、という点での論証はここで終わります。

※参考文献　　ダライ・ラマ法王『智慧と慈悲』　　マリア・リンチェン訳　春秋社　P92-93

＞私たちの心が体験する、幸せや苦しみなどの感覚を調べてみますと、そのような意識の中に現れる感覚にも、やはり部分があるのです。それらの意識を分析していくと、時間的な前の部分や、後の部分などが存在します。

そこで、私たちの心が味わっている感覚的体験は、いったいどこにあるのかを分析してみると、それは前の瞬間の中にも、後ろの瞬間の中にも、どこにも見出すことはできません。

これらのことからわかるように、外の世界に存在している形のあるものであっても、私たちの心の中に存在しているものであっても、そのもののあらわれに満足することなく、それらがいったいどこに存在しているものなのかを分析して調べてみると、ここにあると指さして示せるような実体は、どこにも見つけることができないのです。

※参考文献　2017年9月5日　野田先生『補正項』の「刹那滅」より

＞週に2回、『解脱の宝飾』のオンライン勉強会をしているが、今日のところに、刹那により無常であることは、前の刹那の時のその器世間は、後の刹那の時に住していない。住しているように在るのは、他の似たものが生起したのです。例えば、流れる水のようにです。

Third is impermanence "seen in the vanishing of the instant moment," each and every moment. The first moment of this world does not exist in the second moment. Each moment is similar and because of the similarity, we are deluded and perceive them as the same, like the flowing of a river. という一節があった。これは器世間（物質世界）の刹那滅を言っているのだが、衆生世間（精神世界）も刹那滅している。むしろ、衆生世間が刹那滅するから

器世間も刹那滅するのだと思っている。衆生の心は刹那滅する。いま一瞬の心は消えて、次の心が起こる。今の心と次の心は似ているが、しかし違っている。似ているのは習気（じっけ）（あるいは熏習（くんじゅう））と呼ばれるものがあるからで、アドラー心理学風に言うとライフスタイルがあるからだ。それで似た心が起こるのだけれど、しかし違った心だ。その心が世界を見ている。いまの心が見た世界と次の心が見た世界とは、似ているが違っている。なぜかという、見ている心が違っているからだ。

ここで、「えっ、心とは関係なく客観世界があるんじゃないの？」と思うのは現代人だからで、仏教徒はそうは思っていない。もし仮に心と関係なく客観世界があったとして、われわれはどのようにしてそれを知ることができるのか。心でもって知るしかないではないか。心と独立の客観世界を知ることではできないので、知っているのはすべて心で知った世界だ。そういうわけで、器世間（物質世界）が刹那滅であるかないかは証明不能の命題であることになり、衆生世間（精神世界）が刹那滅であるかぎり、器世間は刹那滅の存在として衆生の心に顕れるということしか言えない。

そうであるとすれば、心が刹那滅であることの方が本質的であることになる。刹那滅であるから、心は変化することができる。外から縁（所縁縁）がやってきたとき、それまでの不善の習気（因縁）に気がついて、それが与える不善の対処行動ではなく、仏の教えに従った善の対処行動で反応すると、新しい善の習気が生じる。これを漢字の仏教では「種子生現行、現行薫種子」という。こうして心を浄めていく。なんのことはない、アドラー心理学とまったく同じプロセスなのだ。あたりまえだよ、正しいものはひとつしかないはずだから。

習気が動いた瞬間に気がつくためには、2つのことが要る。ひとつは瞑想をして心を覚醒させておくことだ。「あ、いつものパターンだ」と気がつかないと、無意識にいつものパターンを繰り返す。もうひとつは、これはアドラー心理学にはない要素だが、仏さまの加持力（増上縁）をいただくことだ。いつでも本尊から心を離さず、本尊が仰るように対処行動を選ぶ。

悪趣を閉ざす聖母に頂礼す 善趣へ導く聖母に頂礼す

いつでも御身はともにあり 悲心で守りたまえかし

『ターラー菩薩成就法』の終りにあるアティーシャ大師の祈願文の一節。

第二〔：心それは誰も見る事が無いので、本当には成立していないこと〕の義を説明するなら、

「心」といわれるこれは、身体の外・内・間の三つ、上下どこに住するのを探します。色（しき）または顕色（いろ）はどのようにあるかをよく観察し、決定知が生ずるまで求めることと、所縁の次第を改めることなどを〔正師の〕お口から知るように探します。

次に、

論証する命題、唯識派が実在を主張する「自証知や自明知の心」が成立しない、というについて、第二〔：心それは誰も見る事が無いので、本当には成立していないこと〕という論理による論証に、入っていきます。

それはどのように探しても、〔それ自体として〕見えないし、得られないなら、見えるべきもの、または顕色の事物の相は、少しも無いのです。〔それ自体として〕有るものそれは、見えないし得られないわけではない。探す者自らの知の対境を越えているし、語る・思う・知る・述べるの対境を越えているものなので、何としても探したことにより、見えないのです。

と、論理による論証をしているのだと思います

以下、経典による論証が続きます

すなわち、『迦葉所問経』^(訳註 31)に、「カーシャパよ、心は内にも無い。外にも無い。両者の中間にも認得されない。カーシャパよ、心は伺察しえない。示しえない。依りえない。現れが無い。表識が無い。住することが無い。カーシャパよ、心は一切諸仏もまた〔現在に〕見られない。〔過去に〕見られなかった。〔未来に〕見られることにならない。」と説かれています。

『迦葉所問経』：心は内にも無い。外にも無い。両者の中間にも認得されない。心は一切諸仏もまた〔現在に〕見られない。〔過去に〕見られなかった。〔未来に〕見られることにならない。

『正法撰持経』^(訳註 32)にもまた、「ゆえに心は集積と報いが有るわけではなくよく知って、それを心髄だと執らえない。それらは自性により空である法。それらに成立は無い。一切諸法は仮設されている。自性をそのように説示し、二辺を制圧してから、賢者たちは中〔道〕を行ずる。自性により法は空。それが正覚の道である。私もまたそれを説いたのです。」と説かれています。

『正法撰持経』：心は自性により空である。

『法性不動經』^(訳註 33)にもまた、「一切諸法は自性により生じていない。自性により住していない。業と所作の辺すべてを離れている。＊分別と無分別の対境を越えている。」と説かれています。よって、その心は誰も見ないから、自証知、自明晰だと述べることは無意味です。

『法性不動經』: 一切諸法は自性により生じていない。自性により住していない。その心は誰も見ないから、自証知、自明晰だと述べることは無意味です。

『入菩提行論』^(訳註 34)にもまた、「何によっても見られることが無いなら、明晰または非明晰は石女（うまずめ）の娘の媚びのよう。それは語っても意味がない。」と説かれています。テーローパもまた^(訳註 35)、「ああ、これは自内証智。言語の道を越えていて、意の行境ではない。」と説かれています。

『入菩提行論』: 唯識派が実在を主張する「自証知や自明知の心」は、石女の娘の媚びのように意味がない

テーローパ: 唯識派が実在を主張する「自証知や自明知の心」は、自内証（自己の内心の悟り）の智である」

以上、唯識派が実在を主張する「自証知や自明知の心」は、2) 誰も見ることはないので本当は成立していない、という点での証明はここで終わります。

最後に、論証する命題、唯識派が実在を主張する「自証知や自明知の心」が成立しないとについて、第三：[対境が無いので、心は成立していないことです。]という論理による論証に、ここから入ります

第三〔：対境が無いので、心は成立していないこと〕の義を説明するなら、また上に説明したように、色（しき）などの外の対境は成立していないから、それを執らえる〔能取の〕内の心もまた成立していないのです。

まず、論理による論証をしているのだと思います。

そして、

以下、経典による論証が続きます。

『説法界体性無差別品』^(訳註 36)にもまた、「心これは、青、または黄、または赤、または白、または茜色、または水晶色のよう、または真実である、または非真実である、または常である、または無常である、有色のもの、または無色のものといって個々に証得してください。心は有色ではない、説示しえない、障礙が無い、能表ではないので、内に住しない、外に住しない、両者の間に住しない〔。です〕から、真実には成就しているわけではないし、それから解脱することはない——それが、法界の自性です。」と説かれています。

『説法界体性無差別品』：心は、内に住しない、外に住しない、両者の間に住しない〔。です〕から、真実には成就しているわけではないし、それから解脱することはない——それが、法界の自性です。

『入菩提行論』^(訳註 37)にもまた、「〔知られるべき〕所知が無いなら、何を了知する〔のか。それ〕なら、何がその知識を述べるのか。」というし、^(訳註 38)「よって、〔知られるもの・〕所知が住することが無いので、〔知るもの・〕能知は無いと決定します。」と説かれています。それらは、内の能取の心が成立していないことを、説いています。

『入菩提行論』：〔知られるもの・〕所知が住することが無いので、〔知るもの・〕能知は無いと決定します。

以上、唯識派が実在を主張する「自証知や自明知の心」は、3) 色(しき)などの外の対境は成立していないから、それを執らえる〔能取の〕内の心もまた成立していない、という点での証明もここで終わります。

よって、「或る者〔、独覚と唯心派〕^(訳註 29)は、内の〔知るもの・〕能取の心は、自証知、自明知として本当に成立していると主張します。」という見解について、1) 2) 3) の点で「成立しない」という冒頭の**命題**は、**論理による論証**と、**經典による論証**によって、論証されたこととなります。

※参考文献：Dリンポチェ『智慧波羅蜜』のご法話より引用

「他」、「他のもの」は、現れているだけで実際は「空」です。それは、現れているだけで本当は真実としては成立していません。本当は「他」がないのに、なぜそう思うのかというと、心がそう思い込んでいるからです。分析すると、心も本当はありません。

他も真実として無い、自分も真実として無いとわかります。

「空」をどうやってわかるのでしょうか。本当に空なののでしょうか。空はあるのでしょうか。「無我」と言っても、「私」はあると思っています。

本当に空性を理解しているのは仏です。仏は、私たちと同じように人間に生まれ、資糧を積み、罪を浄めて仏になった方です。仏になるということは、空性を理解して、「無我」を理解されたということです。

輪廻している私たちは、空性がわからず「我が有る」とと思っています。仏は我々に「無我」をわからせるために、法を示されました。

「空性」を、仏は理解しています。それを認めることは簡単には出来ないことですし、実践しなければわかりません。最初から「対象としての父や母は、本当は存在しない」と言われても、よくわかりません。そこに疑いや疑問が出ます。しかし、資糧を積んで罪を浄めることで、徐々に疑いが晴れていきます。疑うことは仕方ありません。（中略）「無我」と聞いても、最初は全く理解できず、「おかしいのではないか」と思うかもしれませんが、理解することは可能です。「我」は、真実としては成立しません。「それは有る」と思っているだけです。仏は、「無いものを有ると思っている」ことを理解しています。

では、「無我ならば、私は無い」と考えるのも間違いです。「私が有る」と考えるのも、「私が無い」と考えるのも間違いです。空性とは、有無を離れたものです。「有でもなく無でもない」のが空性です。ここを間違えると、「私が無いので、来生も前生も無い」と誤ってしまいます。「無我」と言いう時の「無い」は、「真実として成立していない」ことを意味します。これがわかることが智慧です。「無い」と考えることもまた無明です。智慧とは、有無の辺、「有る」「無い」という辺から離れ、「無いでもなく、有るでもない」とわかることです。（中略）「真実として成立している」と思っているため、私たちに苦しみが現れます。私たちはいつも「本当にある」と思って、それを信じるために苦しみが生じます。仏は「それは真実としては成立していない」と説かれました。最初から「真実として成立していない」ことがわかっていたら、苦しきも生じません。